

[009] 九州大学附属図書館研究開発室年報 :  
2004/2005(9)

<https://doi.org/10.15017/2833>

---

出版情報 : 九州大学附属図書館研究開発室年報. 2004/2005 (9), pp. 1-63, 2005-06-01. 九州大学附属図書館研究開発室

バージョン :

権利関係 :



# 平成16年度における研究開発

## 1 図書館の将来計画に関する調査研究

室 員 荒木啓二郎（附属図書館副館長、システム情報科学研究院教授）  
担当部署 情報管理課長

### 〈研究開発概要〉

九州大学附属図書館としての将来計画、特に元岡地区への移転統合、国立大学法人化に伴う図書館運営のあり方、分散キャンパスにおける図書館サービスのあり方等について調査研究することを目標として活動している。

平成16年度は、平成17年10月に開館する理系図書館のサービス・業務運用計画についての検討、理系図書館の資料配架・蔵書構築計画についての検討及び六本松地区の箱崎地区暫定移転に伴う図書館サービスのあり方についての検討を中心に行った。

### 〈研究開発の内容〉

#### 1 理系図書館におけるサービス・業務運用計画についての検討

平成15年度にとりまとめを行った『新図書館におけるサービス計画：業務運用の概要』をもとに、工学系部局の移転時におけるサービス及び業務運用の詳細について検討を行い、『理系図書館 サービス・業務運用計画2005』の取りまとめを行った。

#### 2 理系図書館の資料配架・蔵書構築計画についての検討

理系図書館の完成時における資料配架計画を検討するとともに、工学系部局の移転時に対応した配架計画及び蔵書の初期構築計画について検討し、『理系図書館 資料配架計画2005』を取りまとめた。

#### 3 六本松地区の箱崎地区暫定移転に伴う図書館サービスのあり方についての検討

六本松地区の箱崎暫定移転に伴い、六本松分館所蔵資料の箱崎地区における配置方法及び図書館サービスのあり方について検討を行い、報告書を取りまとめた。

## 2 統合移転後の新図書館計画に関する調査研究

室 員 堀 賀貴 (人間環境学研究院教授)  
室 員 平井 康之 (芸術工学研究院助教授)  
担当部署 情報管理課長補佐・情報管理課企画掛長

### 〈研究開発概要〉

新キャンパスに計画される新図書館について、建築及び設備の面から、理想的な大学図書館を建設することを目的に調査研究を行っている。今年度は、特に平成17年10月に開館する理系図書館のエントランスプラザの運営方法や家具選定の方針についての検討を中心に進めた。

### 〈研究開発の内容〉

#### 1 理系図書館エントランスプラザの企画運営についての検討

理系図書館のエントランスプラザを新キャンパス全体のハブ、糸島地域のコミュニティのハブとして位置づけ、多角的に活用できる空間として運営することを検討するため、附属図書館の中にワーキンググループを組織して検討を進めた。

#### 2 理系図書館エントランスプラザの家具についての検討

理系図書館のエントランスプラザの企画運営について検討を進める中で、その場にふさわしい家具について検討を行った。ユーザーサイエンス機構の新キャンパス実験・感性空間プロジェクトが開催するビッグオレンジ・ワークショップにおいて、複数の家具メーカーからプレゼンテーションをしてもらい、その中から家具選定の参考とした。

## 3 電子図書館システムの研究開発

室 員 村上 和彰 (情報基盤センター長、システム情報科学研究院 教授)  
室 員 池田 大輔 (研究開発室 助教授)  
室 員 南 俊朗 (研究開発室 特別研究員、九州情報大学教授)  
担当部署 情報システム課電子情報掛長  
担当部署 情報基盤センター電子図書館掛長

### 〈研究開発概要〉

平成16年度は、継続で科研費(基盤研究(B)「RFIDシステムの大規模図書館への適用に関する実証的研究」)による助成を受け研究を進めた。また、年度の途中から新たに、九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト(P&P)の助成を受け「ユビキタス社会における電子図書館のソフト面高度化に関する研究」というプロジェクトを開始した。このP&Pプロジェクトは、若手中心で文理融合という変わったプロジェクトであり、附属図書館(池田)、法学研究院、人文科学研究院、経済学研究院、情報基盤センター、システム情報科学研究院の研究者が含まれる。

この課題は、電子図書館に関するものであり、一般に電子図書館機能は以下の3つに分類されると考えられる。

- 1) 資料の電子化
- 2) (ネットワーク化、Web化も含む) インターフェイスの改善
- 3) 自動化・省力化

これらについて、昨年度の成果の概略を報告し、さらに、従来なかった視点としてユーザの視点から見た電子図書館についての研究について述べる。

## 〈研究開発の内容〉

### 1 電子化

科研費(研究成果公開促進費)の助成を受けた「歴史・文化空間文献(画像)データベース」プロジェクトにより、哲学・史学・心理学分野における貴重な文庫類を画像化した。

### 2 自動化

自動化の中核はRFID技術であり、これについては藤崎先生と共同で行っているため、ここでの報告は割愛する。

### 3 インターフェイスの改善

本の背表紙を画像として撮影し、実際の書架のように見せるインターフェイス「仮想書架」のプロトタイプを実装し、システムとしての応答時間を評価し、多くの画像を使うにもかかわらず、現実的な利用が可能であるとの結果を得た。

また、図書館のWebページによりこのプロトタイプを告知し、ユーザに視認性や使いやすさを評価してもらい、おおむね好評であった。特に、視認性の向上については具体的な数値としてよい結果が得られた。

また、電子化資料のインターフェイスとして、すでに電子化を行っているカード目録の画像データベースインターフェイスを改善し、より使いやすくした。

### 4 ユーザによる価値の創造と共有

上述の3つの観点は、従来からある電子図書館のものである。さらに、ユーザを中心にした新たな電子図書館を構築したいと考えるが、そのためにはまずプライバシーや個人情報、個人の読書履歴のセキュリティ確保が大前提である。そのため、プライバシーと図書館について法学研究院の安東先生と問題点を協議し、これを解決する具体的な方法としてシステムLSI研究センターが提案するPersonal IDシステムを利用するモデルを提案した。平成17年度には、さらにこれを進め、利便性と安全性を両立する電子図書館の新しいモデルを提示できると考えている。

## 4 RFIDタグによる図書館運用に関する調査研究

室 員 藤崎 清孝 (システム情報科学研究所助教授)  
担当部署 附属図書館情報サービス課情報サービス第一掛長

### 〈研究開発概要〉

九州大学附属図書館における図書貸出／返却窓口の作業の効率化、図書検索時間の短縮、無人ゲートによる入退館管理など、図書館サービスの拡大を目指し、ICタグを用いた図書館運用に関する研究・調査を行う。

### 〈研究開発の内容〉

図書館業務の電子化、自動化を進めていく上で、蔵書管理の電子化は一つの鍵となる。身近な存在と成りつつある非接触型のICタグ（以降RFIDタグ）は、その核となる技術であり、このRFIDを蔵書に貼り付けることにより、非接触で蔵書の情報を読み書きできるようになる。すなわち、このRFID1つで、磁気タグによる盗難防止機能とバーコードによる蔵書情報の管理が実現可能となる。この結果、(1) 図書貸出／返却窓口の作業の効率化、(2) 図書検索時間の短縮、(3) 無人ゲートによる入退館管理、(4) 蔵書管理の効率化が期待できる。

今年度は、昨年度末に筑紫分館新館に移設したRFIDタグを用いた図書館管理システムの運用状況を評価した。この結果、RFIDタグを用いたシステムは、これを設置する図書館及びその周辺の構造から受ける影響が大きく、設置場所及び状況に応じた細かい調整が必要であることが明らかになった。具体的には、旧館から新館への移設後、図書に貼り付けたタグをきちんと認識出来ない状況が多々観測されており、その動作も不安定であることが確認されている。移設後、数回の調整を行ってはいるが、この問題が十分に解消されるまでには至っていない。今後、システムの状況並びにこれに悪影響を与えるような電波伝搬環境が存在するかなども含めた調査が必要である。

RFIDシステムが広く知れ渡るにつれ、これを図書館管理のために導入或いは導入を検討する図書館が増えてきており、これらの図書館の視察及び意見交換を幾つか行った。その1つに、福岡市がNTT西日本と共同であいれふ図書室にて実施した実験に対する視察及び意見交換がある。この実験では、上記の効率化に加えて、サービス向上を目指したデータ収集及びインターネットと連携した情報提供などの新たな取り組みへの検討も行っていた。更に、春日市民図書館において禁退出の図書に対する不正防止にRFIDシステムを用いている状況を視察した。

今年度はRFIDシステムの開発状況、他の図書館での導入状況などの調査が主であったが、これらの結果を参考に、今後は、本学においても図書館管理の効率化だけでなく、新たなサービスの提供を目指した取り組みに対する検討を進めていく予定である。その一つに書架にリーダを組み込むことで図書の動きを調査し、利用者へのサービス向上へと発展させる技術などを検討していく予定である。また、従来の課題であるRFIDシステムの高性能化の検討、図書館相互利用なども考慮した、図書館における最適なRFIDシステムおよびRFIDタグの標準仕様を検討したい。

## 5 レファレンス事例検索システムに関する調査研究

室 員 竹田 正幸 (システム情報科学研究院教授)  
担当部署 情報サービス課参考調査掛長

### 〈研究開発概要〉

本研究課題は、九州大学附属図書館におけるレファレンス業務支援のために、過去の事例を蓄積し、今後のサービス提供に役立てるためのレファレンス事例検索システムの構築に関する情報収集と調査研究を目的とする。電子図書館におけるレファレンス業務支援の基本は、日常的なレファレンス業務を通じて業務情報を再利用可能な形で収集・蓄積・再構成し、それを日常業務における利用者支援のために活用することである。業務情報の蓄積・再利用によって、利用者支援、新人教育、利用者の潜在的要求の発見などを効率よく行える。蓄積された業務情報は、(1) 多様で (2) 非定型な (3) 大量のテキスト情報である、という特徴を持っている。一方、現在の情報検索／採掘技術は、表形式の関係データを対象としたものが主流であって、上述の業務情報にそのまま適用することはできない。今後、業務情報の蓄積が進めば、この問題は一層顕在化するであろう。そこで、本年度は前年度に引き続き、多様・非定型・大量のテキスト情報から効率よく情報を抽出するための基礎研究およびソフトウェア開発を行った。

### 〈研究開発の内容〉

#### 1 半構造データ検索エンジンの開発

図書館の電子化と情報共有の標準化に伴い、XMLやRDFなど半構造データとしての情報の蓄積が盛んになると予測される。これらの半構造データに対する既存の情報検索技術は、(1) XML-enabled database、(2) Native XML databaseの二つに大別される。前者は既存の関係データベース技術に皮を被せたもので、XMLデータを関係データの形式に変換するため、XMLの柔軟性を損なう。一方、(2)はXMLデータをそのまま扱うが、既存の技術はデータが大量になると必要な記憶領域量が膨大になり、事実上使用できない。そこで、大量の記憶領域を必要とせず、かつ、柔軟な処理を高速に行うことのできる検索エンジンを開発した。

#### 2 テキストデータからのパターン発見基盤技術の開発

大量のテキストデータからその特徴となるパターンを発見するための基盤技術を研究開発した。応用として、Web上から得たテキストデータ群の特徴づけや分類、また、必要なものだけに絞り込んで行く作業等が考えられる。

## 6 貴重資料の画像及び書誌データベース作成に関する研究開発

(『かげろふの日記解環』付・文政元年刊『蜻蛉日記』画像データベースの作成)

室 員 今西 裕一郎 (人文科学研究院教授)  
担当部署 情報サービス課図書館専門員

### 〈研究開発の内容〉

「貴重資料の画像及び書誌データベース作成に関する研究開発」では、ここ数年来、古活字版『源氏物語』、無刊記整版『源氏物語』、古活字版『枕草子』(付 慶安4年刊整版)、『清少納言枕草子抄』、『萬水一露抄』といった、平安時代の物語・草子とその注釈書の画像データベース作成に取り組んできた。

画像には、『源氏物語大成』や『校本枕冊子』など、当該作品のもっとも信頼できるテキストで、かつ索引機能を備えた活字本の頁数を付すことにより、検索可能な画像データベースとしての作成を心がけてきた。

本年度も、引き続き平安時代の仮名文芸『蜻蛉日記』を取りあげ、江戸時代になって初めて著された唯一の全巻注釈書『かげろふの日記解環』と、その元になった本文、板本『蜻蛉日記』のうち、文政元年刊本の画像データベースを作成した。

○

『蜻蛉日記』は平安時代中期、藤原倫寧女で藤原兼家室となり、兼家との間に一子道綱を儲けたことから「道綱母」と通称される女性の手になった仮名日記である。

道綱母の名は、『百人一首』に撰ばれた、

嘆きつゝひとりぬる夜のおくるまはいかに久しきものとかはしる

の歌で名高いが、この歌も『蜻蛉日記』に収められている。

『蜻蛉日記』は文学史上、仮名日記としては紀貫之の『土佐日記』に次ぐ位置にあり、『枕草子』や『源氏物語』より一世代前の仮名文として、平安時代の文学、語学両面において重要な作品である。

書名『かげろふの日記』は、上巻末の、

かく年月はつもれど思ふやうにもあらぬ身をし嘆けば、声あらたまるもよろこぼしからず、なほものはかなきを思へば、あるかなきかの心ちするかげろふの日記といふべし。

の一文に由来する。平安時代にすでにこの書名で呼ばれていたことは、『大鏡』兼家伝の最後に記された次の一節によっても明らかである。

二郎君、陸奥守倫寧のぬしの女の腹におはせし君なり。道綱ときこえし、大納言までなりて右大将かけたまへりき。この母君、きはめたる和歌の上手にておはしければ、この殿のかよはせ給へりけるほどのこと、歌など書きあつめて、かげろふの日記と名づけて世にひろめ給へり。

本日記は通常、版本における表記を踏襲して『蜻蛉日記』と表記されることが多いが、これは正確

な表記ではない。

平安時代、「かげろふ」には二つの意味があった。一つは従来この日記の書名に用いられてきた「蜻蛉」の訓で、「とんぼ」やそれに類する小昆虫をさす。これは『源氏物語』の蜻蛉巻で、

かげろふのはかなげに飛びちがひて

と用いられている。

それに対して、いま一つは、院政期の辞書『類聚名義抄』に

陽炎 カゲロフ

と記される、万葉時代には「かぎろひ」と呼ばれた自然現象をさす。

この問題につき、本日記の「かげろふ」が「蜻蛉」ではなく「陽炎」の意の「かげろふ」であることを明確に論じたのは、近代以前に著された唯一の『蜻蛉日記』の全注釈『かげろふの日記解環』である。『解環』は巻一、凡例之上、「題号弁」に以下のように説いている。

今世流布ノ印本、蜻蛉日記ト題書セリ。蓋是源氏物語ニカゲロフノ巻アリテ、多クハ蜻蛉トカケルニオノツカラ習ヘルニヤト思ハル。愚オモヘラク此日記上巻ノ結語ニ、物ハカナキヲ思ヘハ有カナキカノ心チスルカケロフノ日記ト仮字ニテアリ。此日記ヲ大鏡ニイヘルモ同シク右ノヤウニカケリ。サレハ日記ニイヘル処ノカケロフハ、周荘カイハユル野馬ニシテ陽炎也。詩ニモ作レル所ノ遊糸ニ同シ。且此日記ヲ八雲御抄学書篇ノ私記ニ遊士ノ日記トアケタリ。士ト糸ノ字トハ和音ノトナフル声同シキニヨリテ、蓋印本ニウツシアヤマリシトオモハレテコレノ証拠ナリ。

まさしく『解環』の著者の説く通りであり、本日記の題号は『かげろふの日記』と表記されるべきであるが、版本以来、『蜻蛉日記』という漢字表記が採用され、その習慣は少数の例外（川口久雄「日本古典文学大系」、次田潤・大西善明『かげろふの日記新釈』、佐伯梅友・伊牟田経久『かげろふ日記総索引』、増田繁夫『かげろふの日記評注』）を除いて今日まで続いている。

○

『蜻蛉日記』は平安時代の作品であるが古写本に恵まれず、今日の研究も、宮内庁書陵部蔵の近世初期の写本桂宮本に依拠する状態が続く。作品が書かれてから600年間、転写に転写を重ねてきたであろう本文は、最善本に位置づけられる桂宮本においても相当に損なわれており、そのままでは意味不明の本文が随所に見出される。

本日記の本格的な研究は、契沖が元禄十年に出版された版本に自説を書き入れたことに始まり、以後その契沖書き入れが好学の和学者に受け継がれ、校訂の試みがさまざまになされてきた。そのなかで唯一『蜻蛉日記』全体にわたる注釈書として刊行されたのが、『かげろふの日記解環』（天明年刊）である。

著者の坂徴（さか・しるし、またチョウとも）は、元禄十年（1697）生まれ、天明五年（1785）没。阿波出身で京都に住んだ国学者。

坂徴の注釈の特色の一つは、契沖書き入れを尊重しつつ、契沖の改訂案が示されなかった難解箇所についての様々な改訂案の提唱、就中、変体仮名の字形転訛に注目した改訂案の提示である。その基本方針は「凡例之上」に、

契沖諸本ニ直シノ無所ニ及デハ、止事ヲ得ズシテ憶説ヲモテアナグリ求キ。ソノ求ムベキ手ヲヨリハ万ノカナノ転訛セルヨリオシハカリテ、やゝ本ニ復サンヨリ外ニ又術ナキコト治定セルニヨリテナリ。

と述べられ、「そ」と「う」、「ら」と「る」、「な（那）」と「れ」などをはじめとする、変体仮名の字形の類似による文字転訛を指摘し、具体例を挙げて詳しく解説する。

そのような観点からの本文改訂は、本日記開巻早々から実践されることになる。『蜻蛉日記』上巻はじめ、兼家からの求婚を記すくだりは、

さてあのけかりしすきことゝものそれはそれとして、かしわきのこたかきわたりよりかくいはせんとおもふことありけり。

という文章ではじまるが、そこに見いだされる「あのけかりし」という語は、他に用例を見ない不可解な語である。『解環』は、この「あのけかりし」を「あはつけかりし」と改訂した上で、次のように述べる。

アハツケカリシノあはつヲ原本あのニ作レリ。契沖本ニハ本ノマヽ言ヲ加ヘズアリ。愚案ニ恐ラクハはつノ二字訛テ乃ニ変ジタルモノナリ。源氏ヲトメノ巻ニ、人ノキヽ思フ所モアハツケキヤウニナン。又ヤドリ木ノ巻ニ、アハツケサトモイヒ、帚木ニアハツカニトアル、皆アハクシキノ淡ニシテ、誠実ナキノ詞也。

この箇所については、他に「あふなかりし」という改訂案も版本の書き入れに見え、今日でもそれと同じ改訂を施す注釈書（『日本古典文学大系』）もあり、また「あへなかりし」という改訂案（『日本古典文学全集』）もあって、見解の一致を見ないが、「あはつけかりし」は今日なお有力な一説である。

変体仮名の字形の類似に基づく転訛による改訂は、その行き過ぎが危惧された時期もあったが、柿本奨『蜻蛉日記全注釈』において再評価され、同書において柿本氏によるさらなる改訂案が多数提出されている。

『蜻蛉日記』の本文復元の最大の手がかりは、やはり変幻自在な変体仮名の字形であり、今日なお本文改訂の原点というべく、その意味で本書『解環』は今後とも『蜻蛉日記』本文整定作業の出発点となる著作である。

本書は唯一の『蜻蛉日記』全注として、早く明治・大正期に「国文注釈全書」、「国文注釈叢書」に翻字して刊行されたが、そのいずれにおいても原本の漢字・カタカナ交じり表記が、漢字平仮名表記に変えられ、原著の趣を損うこと著しいものがあった。

今回、『かげろふの日記解環』ならびに版本『蜻蛉日記』の画像データベースを作成し、本日記研究の原点に立ち返る一助とする。

○

なお、今回、画像データベースの底本とした『かげろふ日記解環』には、本体全19冊とは別に、その刊行・発売に先立って制作されたとおぼしい、同様の装丁になる内容見本が附属している。版本書誌学の権威中野三敏氏によれば、当時としてはきわめて希な事例であり、江戸時代出版史として注目に値するという。

よって、本データベースの解説執筆に際し、中野氏にその内容見本についての解説執筆を依頼し、以下のような一文を頂戴した。氏のご芳情に心より御礼申し上げる。

## 『かげろふの日記解環』 内容見本付き予約募集冊子について

中野 三敏 (九州大学名誉教授・福岡大学教授)

本冊は、首一丁が板元の林伊兵衛による、天明三年正月付、予約募集の文言にあてられ、全十八冊の正価五匁のところを、五月迄に入金され、ば廿八匁で、来年三月迄に配本する旨が記され、以下、内容見本として著者坂徹の自序全部六丁分を、凡例の初二丁分、本文上巻のやはり初めから四丁分迄、以上全十三丁を以て一冊とする。

本巻十八冊と比べて縦の寸法が二、三ミリほども小さく、表紙も、本巻のそれが縹色地に濃緑の横雲六筋を引くのに対し、縹色無地の厚紙を以てするので、明らかに本冊とは別仕立であり、本巻第一冊の刷上りに先がけて、内容見本付き予約募集冊子として配本されたものであろう。自序六丁分の諸所に洩え残しの痕跡が残り、一丁ウ四行目下部「紫」字の右傍には振仮名の文字を彫りつけた上から、墨板を用いて訂正を企てた墨格が残されるなど、本巻十八冊の刊行に先がけてのものであることは明白である。

但し蔵書印は本巻と同じ「猪熊蔵書之印」の朱條印を持つので、猪熊氏の入手時点では本冊を附属した十九冊となっていた事も明白である。

以上、本冊は板元林伊兵衛により、本巻刊行に先がけて、内容見本付き予約募集の為の冊子として配本されたものであることは明確だが、筆者は寡聞にして江戸期における同様の事例を知らない。

但し、単なる予約募集の摺り物については、以下の三例を掲げることは出来る。

(一) に、『群書類従』開板予告・予約募集の一枚摺り。(天明六年)

これは現内閣文庫蔵、大田南畝自筆本『一言一話』巻六「塙保己一」の項に実物の刷物一枚が貼付してあるもの。既に岩波書店版『大田南畝全集』第十二巻二五七頁に影印と翻字を載せたので御参照願いたい。初めに部立てと巻数のみを列記し、その後に「望の者多く有之候卷、先々月より一二冊づゝ開板仕候間、御懇望の方は当六月廿五日より十月六日迄に、土手四番町塙検校宅え可被御遣候。～料は今物語の通の紙仕立にて、紙十枚六分二リン、仕立て四分五リンに御座候」とあって、南畝の書き込みに天明六年のものという。

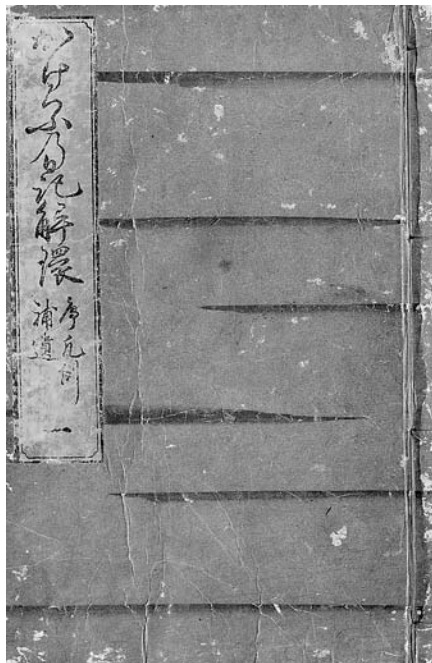
(二) に平田篤胤が企画した「進学会積金仕様」と題する一枚摺り(天保四年十一月)。これは篤胤・鉄胤父子が自著板行推進の為に企てた組織作りの為の規定書であり、渡辺金造(刀水)著『平田篤胤研究』の三四二頁に全文翻印されている。世話人に和泉善平と下総の宮負佐平という門人代表を置き、集金方には神田岩井町の小林三右衛門の名があって、一口分として月に銀一匁宛を積立てることとし、「出来次第、御加入の方々へは、一口分へ書物一部宛呈上可致候」といゝ、「門人衆中は自他とも御一人にて十口以上、二百口も御持可被下候事」と大分厚かましい。

(三) に、「活字版宋槧太平御覧印刷之大意」(安政二年)。

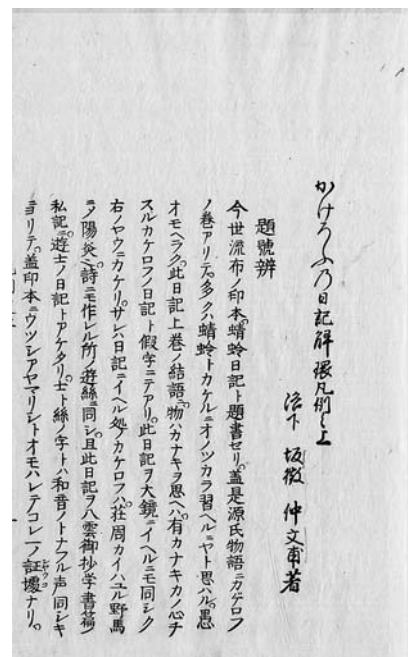
進学館教諭喜多村直寛が、和刻本『太平御覧』一千卷百五十三冊を木活字で刊行を図った時の刷り物で、それ自体を木活字で印刷したコヨリ綴じ二丁半のもの。現東京大学南葵文庫蔵の『太平御覧』に付けられている。これも「雅俗」第五号(平成十年一月)の一八八頁に影印を載

せた。「巻帙夥多ナレバ費用モ亦少カラズ。因テ今御覧一帙ノ価ヲ十二円三方ト定ム。目録ヲ一帙トシ、本文廿卷ヲ以一帙トシテ、一帙成ル毎ニ請人ニ贈ルベシ。其時ニ金一方ヲ投セラルベシ!」「同志ノ士、五六部ヲ引受テ懇友知己へ懇懇シタランニハ、活字ノ書ヲ以テ其ノ周旋ノ勞ニ報ベシ」などとあって、一口に千歳の普及を図るなどとは言うものの、昔も今も大部の出版を企てるには、相当の苦勞がつきものの如くである。

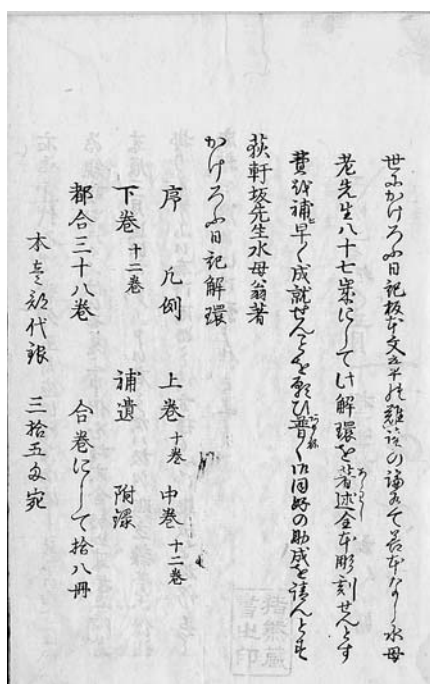
因みに、明治十四年頃から、古書翻刻の予約出版が一時大いに流行したことは、かの『明治事物起原』第七編にも「予約出版の始め」なる一項がたてられて著名な出来事でもあった。そのとき主導役を果たした鳳文館主前田黙鳳の事業については、ロバート・キャンベル氏の詳細な報告が備わる。



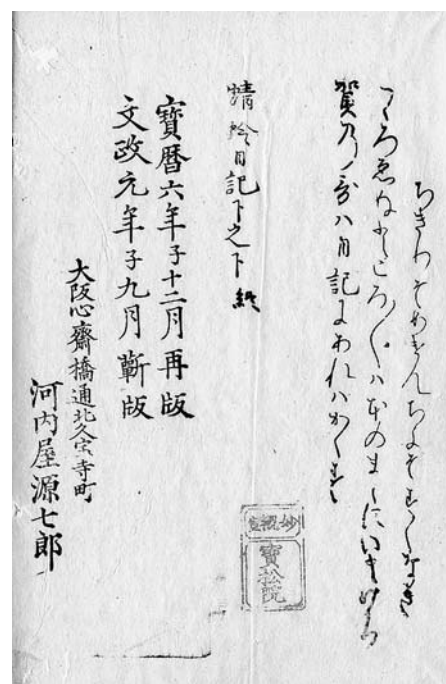
『かげろふの日記解環』表紙



同 本文1丁表



『解環』予約募集冊子



板本『蜻蛉日記』刊記

## 7 医学分館所蔵貴重古医書のデータベース化及び医史学的、書誌学的な調査研究

室 員 **Wolfgang Michel** (言語文化研究院教授)  
担当部署 附属図書館医学分館図書館専門員

### 〈研究開発概要〉

平成11年以降附属図書館医学分館の保存図書館及び医学部の諸研究室から多数の古医書が医学分館へ移され、同分館が保管する貴重図書コレクションは最高水準のものに充実してきている。これらの古書の遡及目録を作成し、データベース化による公開を進め、併せてコレクションとしての医史学的及び書誌学的な資料価値などについての調査研究は本研究室の重要な課題である。

### 〈研究開発の内容〉

遡及目録の作成は本年度も行われたが、さらなる資料の発見及び寄贈により、この作業は今後も継続される見通しである。目録には書誌学的な基礎データの他に、比較社会文化学府の大島明秀の研究協力を得て、付随の情報も豊富に盛り込むことができた。個々の書誌データは国立情報学研究所の総合目録データベースWWW検索サービス (<http://webcat.nii.ac.jp/>) から閲覧できる。さらに貴重古医書コレクションのウェブサイト (<http://herakles.lib.kyushu-u.ac.jp/igaku/index>) では和漢・洋書(書籍、手稿、写本)コレクションの全体像を紹介する総目録も提供している。

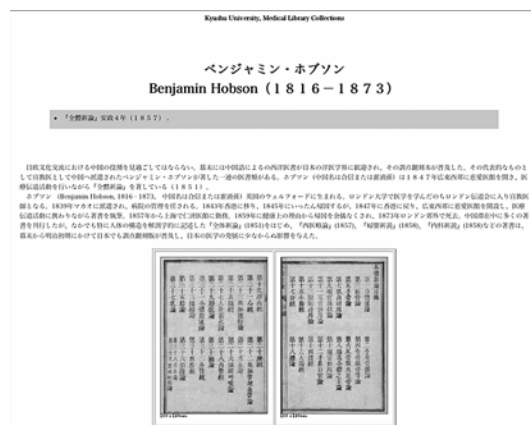


図1 解説文の一例

また、それぞれの専門分野に精通する閲覧者はその資料の内容を把握し、その位置づけもできるだろうが、広く一般にも貴重古医書コレクションの価値を理解していただくため、解説のウェブサイトが設置されている。ここには資料に関する説明及びイラストが掲載されている。今後とも注目に値する文書及び書籍を徐々に紹介していく予定である (<http://herakles.lib.kyushu-u.ac.jp/igaku/expl/index.html>)。

九州大学附属図書館と福岡県立図書館の相互協力協定を記念し、平成17年2月8日から13日にかけてアクロス福岡で開催された展示会「シーボルトがみた日本」では、筆者はシーボルト以前の日本研究者ケンペルの部門を担当し、2月12日に講師として「シーボルトの日本観—日本のシーボルト観」に関する公開講演を行った。

古医書コレクションの調査成果は以下の論文に活かされた。

Wolfgang Michel: Western Medicine and Pharmaceuticals in Seventeenth Century Japan. Proceedings of the Tenth International Conference on the History of Science in East Asia. Shanghai Jiao Tong University Press, 2005, pp.173-184.

Wolfgang Michel, Elke Werger-Klein: Drop by Drop - The Introduction of Western Distillation Techniques into Seventeenth-Century Japan. *Journal of the Japan Society of Medical History*, Vol. 50, No. 4, pp. 463-492.

Wolfgang Michel: Far Eastern Medicine in Seventeenth and Early Eighteenth Century Germany. *Studies in Languages and Cultures (Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University)*, No. 20 (2004), pp. 67-82.

## 医学分館の貴重古医書に見られる近世の書肆と蔵書印について

大島 明秀 (大学院比較社会文化学府)

医学分館所蔵の豊富な資料群からは様々な情報が得られる。その一つが各和本の奥書などに記された近世の書肆（個人出版も含む）に関する情報である。従来、近世の書肆に関する研究は、主に経書、文学書、思想書などを対象として収録・研究されてきたため、古医書からの情報は非常に有益なものとなる。

筆者は医学分館所蔵資料の書誌を調査し、賀茂熊齋述『(陰陽和合) 安産幸運録』の書肆である「玉嶋屋民次郎」など、江戸時代の書肆辞典ともいえるべき『近世書林板元総覧』<sup>[1]</sup>に記載されていない書肆20軒強と、書肆が記された書物の書誌情報を提供した<sup>[2]</sup>。しかしながら、この論考での調査対象は900帙、2300冊強にとどまり、残りの古医書についても今後の調査が俟たれる。

医学分館の目録は、内題・外題・柱題は勿論、書肆、発行地、発行年、序跋者、蔵書印まで網羅している。このような目録を構築したことから、同じ蔵書印が捺されたある一定のまとまりをもった書物群の存在が可視化されることになった。これは書物群が貴重コレクションに搬入される以前、どこから来た蔵書なのか、その由来を示す情報源となりうる。目に付いたものを以下に3つ挙げる。

### 「柳肥園蔵書印」

「柳肥園」が誰を指すのかは不明であるが、現在まで（医学分館貴重和書請求番号イ-337、エ-012、エ-14、オ-20、オ-25、オ-92など）に、この印が捺されていることが判明している。引き続き調査を続けると、さらに「柳肥園蔵書印」が捺された蔵書群の存在が明るみに出てくる可能性は高い。「柳肥園蔵書」は『新編蔵書印譜』<sup>[3]</sup>などにも記載がなく、「柳肥園」とは九州帝国大学時代に教授を務めた人の号かもしれない。

### 「杏仁醫館文庫」

解剖学教室から寄贈された蔵書には「杏仁醫館文庫」の印が捺されているもの（オ-95、カ-167、コ-181、コ-190、ヨ-96など）が少なからず見受けられた。希少価値の高い資料である出島版『ポンペ薬物書』(*Beknopte handleiding tot de Geneesmiddelleer : ten gebruike van de Keizerlijke Japansche Geneeskundige School te Nagasaki / door J. L. C. Pompe van Meerdervoort, Nederlandsche Drukkerij, Desima, 1862*)にもまた「杏仁醫館文庫」の印が認められる。しかしながら、「杏仁醫館」もまた謎である。昔の解剖学教室教授の蔵書ではないかとの疑いが持たれる。



図2 「平田氏記」印

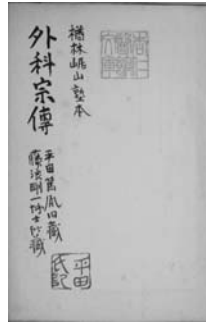


図3 『外科宗伝』の識語

### 「平田氏記」

榎林栄哲原著『外科宗伝』（ケ-122）には、前に挙げた「杏仁醫館文庫」のほかに「平田氏記」という蔵書印が捺されている。これは近世後期に活躍した国学者平田篤胤の蔵書印である。さらに本書には「平田篤胤旧蔵 藤浪剛一博士所蔵」と識語があることから、平田篤胤蔵書であった本書は、次に日本レントゲン学会、日本温泉気候学会及び日本医史学会の創設に貢献した藤浪剛一の所有となり、そして「杏仁醫館文庫」、最後に医学分館に搬入されたという、この書物の辿った複雑な運命が分かる。

医学分館蔵書の貴重古医書の希少性から、そこから採録できるあらゆる情報が研究者に貢献しうるものとなることはいうまでもない。加えて従来不在であった研究視点、たとえば「蔵書印」から貴重コレクションの搬入・構築過程の歴史を追究する試みなど、医学分館古医書の性質、分量の豊富さは、潜在的に多様な研究の可能性を孕んでいる。

[1] 井上隆明『近世書林板元総覧』（改訂増補 日本書誌学大系76）、青裳堂書店、武蔵村山、1998年。

[2] 「九州大学附属図書館医学分館所蔵貴重古医書に見られる江戸時代書肆について」（『比較社会文化研究』第14号、2003年所収）。

[3] 渡辺守邦・後藤憲二編『新編蔵書印譜』（日本書誌学大系79）、青裳堂書店、武蔵村山、2001年。

## 8 古書・文書データベース構築に関する調査研究

室 員 吉田 昌彦（比較社会文化研究院教授）  
室 員 宮崎 克則（総合研究博物館助教授）  
担当部署 情報サービス課図書館専門員  
担当部署 六本松分館図書館専門員

### 〈研究開発の内容〉

前年度に引き続き、六本松分館所蔵の福岡県上広川村役場文書の整理とデータベース化を行い、一応の完了を見た。庶務や会計、産業、土地などに関わる帳簿や書類綴りについて案件ごとにデータベース化を行い、近代役所文書のデータベースとしては極めて精度の高いものと考えている。なお、入力作業は終わっているが、ネット上に公開する時期は未定である。

また、六本松分館所蔵檜垣文庫のなかで目録化が終わっていないものについて、カードデータの確認点検作業を行った。本作業は、資料目録の補遺2の原稿を作成するためのものであるが、まだ、4000件について行う必要性があり、今後も、この作業を引き続き行う予定である。

## 9 アジア研究コレクションの構築及び同コレクション・データベースの構築に関する調査研究

室 員 Andrew Cobbing（留学生センター教授）  
担当部署 附属図書館情報管理課企画掛長

### 〈研究開発概要〉

「アジア研究」及び「日本研究」は、海外の大学では「地域研究」というカテゴリとして定着しているが、日本国内ではそのようなカテゴリで認識されることがほとんどない。現在、本学では研究面で21世紀COEプログラム（「東アジアと日本：交流と変容」）、学术交流の面でKUARO、学生交流面でASEP、JTW、ATWなどのアジアを対象とする企画がそれぞれ個別に展開する傾向にあるが、それらの共有基盤となるべき研究・学習用図書施設は具体化されていない。アジア重視を掲げる本学において展開されるアジアを対象とする様々な研究・教育のプログラムが共有すべき基盤として、本研究は、「アジア研究に関するコレクションの構築」及び「アジア研究コレクション・データベースの構築に関する研究」の2点を柱として展開する。

### 1 アジア研究に関するコレクションの構築

中央図書館三階にある「国際交流コーナー」の存在を生かし、本格的「アジア・日本研究拠点」として開発する企画である。国際交流コーナーでは、留学生用の日本語テキストをはじめ、JTW短期留学プログラムで開講される英語コースのために、10年前からアジア・日本関連の歴史、文学、社会、法律、文学、経済、宗教、言語学などの人文科学系のテキストやリポート用の参考洋書を組織的に購入してきた。さらにソウル大学および慶北大学からの寄贈により、まさにアジア研究施設の母体が現在できつつある状態である。

今後さらに体系的な購入を進め、コレクションの充実を図る。

## 2 アジア研究（洋書）コレクション・データベースの構築に関する研究

国際交流コーナーの洋書はまだ3,000冊程度に過ぎないが、九州大学図書館全体では洋書は約167万冊もあり（2004年3月31日現在）、各部局の図書室所蔵の「アジア研究」関連洋書はかなりの数にのぼるものと思われる。国際交流コーナーのコレクションを中心として、学内の部局図書室等に分散して所蔵される関連図書を調査した上で、アジア研究に関する図書（洋書）のデータベース化を図ることにより、コレクションとして顕在化させる。これにより、九州大学における「アジア研究コレクション」の存在を海外に発信し、海外からのアクセスの促進及び本学に在籍する留学生や研究者のアジア研究図書の利用促進を図る。

### 〈研究開発の内容〉

今年度は主にアジア研究（洋書）コレクション・データベースの構築について、次の点を中心に検討を行った。

#### 1 「アジア研究コレクション」のウェブサイトの試作

「アジア研究コレクション」のウェブサイトを試作し、データベース（目録）作成のための関連カテゴリ・キーワード案を検討した。

#### 2 データベース試作版の作成

すでにリストアップされたタイトル（国際交流コーナーの分）を元に試作版を作成した。各部局図書室等の調査が進み次第随時データベースの構築を図る。

#### 3 データベース構築方法についての検討

当初はHTMLのリストとして作成し、分野別に書誌リストを表示するようにし、ページ内検索の機能を付加するが、レコード件数が増大するとデータの追加・更新等メンテナンスのコストが増大するため、効率的なデータベース構築方法についての検討を行った。方法として、DBMSを採用したデータベースの構築、既存のOPACデータへの件名データ（主題を表すキーワード）の付与等が考えられる。

## 10 海外の大学図書館との図書館間交流の推進に関する調査研究

室 員 松原 孝俊 (韓国研究センター教授)  
担当部署 情報管理課長補佐

### 〈研究開発概要〉

アジア重視を掲げる本学において、附属図書館はアジア地域の大学と図書館間交流協定の締結を進め、韓国のソウル大学校中央図書館（平成11年）、同じく慶北大学校中央図書館（平成14年）、台湾の台湾大学図書館（平成15年）と交流協定を締結した。平成16年度は、ソウル大学校中央図書館との交流をさらに発展させるための業務交流に関する覚書の締結、それを受けてのソウル大学校中央図書館からの客員図書館員の受け入れを進めた。

また、職員を韓国及び中国へ派遣し、それぞれのテーマに沿って調査を行った。

### 〈研究開発の内容〉

5月に許南進ソウル大学校中央図書館長が来館し、職員の交流、出版物の交換、国際ILLなどの図書館協力についての協議を行った。その結果、相互協力と交流を維持し発展させることを内容とする業務交流に関する覚書を締結した。

この覚書の締結を受けて、ソウル大学校中央図書館から李成烈氏を客員図書館員として受け入れることになった。李氏は、平成17年2月に来日し、同年8月までの半年間の予定で研修に取り組んでいる。研修内容は、①資料の保存と管理、②日本における図書館間協力、③日本語スキルの向上の3点である。

また、次のとおり職員を海外へ派遣し、それぞれのテーマに沿って調査を行った。

- ・日韓ILL/DD運用テストの評価及び暫定サービスに関する合同会議出席（於：韓国教育研究情報院）及びソウル大学校中央図書館、延世大学校中央図書館視察（荒木室員、甲斐情報システム課長）
- ・アメリカ合衆国のレファレンスとインフォメーションサービスに関する調査（渡邊雑誌情報掛長）（インターナショナル・ビジター・プログラムによる）
- ・上海で開催された電子図書館に関する国際会議（International Conference on Asian Digital Libraries〈ICADL〉）出席及び上海交通大学図書館、復旦大学図書館視察（池田室員、片岡雑誌情報掛員、星子六本松分館受入掛員）
- ・台湾大学総図書館が所蔵する善本目録作成に関する調査（松原室員、中野三敏名誉教授）

## 11 図書館職員の専門性育成並びにサブジェクト・ライブラリアン制度に関する調査研究

室 員 西村 重雄 (法学研究院教授)  
室 員 竹村 則行 (人文科学研究院教授)  
担当部署 情報システム課図書館専門員  
担当部署 情報システム課データベース掛長

### 〈研究開発概要〉

図書館職員の専門性について明らかにし、その育成方法について調査研究するとともに、本学におけるサブジェクト・ライブラリアン制度のあるべき姿について調査研究を行う。

## 〈研究開発の内容〉

### 1 漢籍講習会の実施

平成15年度より開始した漢籍講習会は、①漢籍についての知識、②九州大学にある漢籍についての知識、この二つを習得することとし、文系地区の元岡キャンパス移転までの間に漢籍についての専門性をもった図書館職員を養成することを目標とした。2年を1サイクルとして実施し、平成15・16年度は入門編として位置付け今年度は下記の通り5回実施した。

[第6回] 平成16年5月28日(金) 15:00~17:00

鈔本と版本の問題—『白氏文集』を中心に— (静永 健 人文科学研究院助教授)

[第7回] 平成16年7月16日(金) 15:00~17:00

中国の日用類書について (中島 楽章 人文科学研究院助教授)

[第8回] 平成16年9月24日(金) 15:00~17:00

中国古代の目録学 (南澤 良彦 人文科学研究院助教授)

[第9回] 平成16年11月19日(金) 15:00~17:00

近世儒学と漢籍 (柴田 篤 人文科学研究院教授)

[第10回] 平成17年1月28日(金) 15:00~17:00

漢籍とインターネット (西山 猛 言語文化研究院助教授)

### 2 ラテン語古刊本書誌作成研修会の実施

今年度は4回の研修会を下記の通り実施した。昨年度に引き続き、発表者を1名決めてその所属する部局の資料を取り上げて報告するというゼミ形式を採った。ラテン語については文法が難しいため、事前にタイトルページを訳す作業を発表者を中心とした複数の人間で行い、各人の知識向上および作業の効率化を図った。

研修会では①タイトルページのラテン語訳②資料の時代背景調査③書誌作成、について発表者が報告し、指導者の西村教授、直江教授に補足説明を受けることにより、事前学習だけではわからなかった部分を補い、参加者全員が共通の認識を持つことができた。

[第1回] 平成16年8月4日(水) 16:00~17:30

研修内容：中央図書館所蔵「Amoenitatum exoticarum politico-physico-mediciarum fasciculi V」(1712年)の書誌作成について(指導者：直江眞一 法学研究院教授)

[第2回] 平成16年11月12日(金) 16:00~17:30

研修内容：文学部所蔵「Marci Antonini imperatoris De seipso et ad seipsum libri XII」(1643年)の書誌作成について(指導者：直江眞一 法学研究院教授)

[第3回] 平成17年2月3日(木) 16:00~17:30

研修内容：中央図書館所蔵「Hoc volumine continentur haec : Commentariorum de bello Gallico libri VIII」(1519年)の書誌作成について(指導者：西村重雄 法学研究院教授)

[第4回] 平成17年3月29日(火) 16:00~17:30

研修内容：法学部所蔵「Joan. Bodini Andegavensis Galli De republica libri sex」(1641年)の書誌作成について(指導者：西村重雄 法学研究院教授)